

碧南市藤井達吉現代美術館における美術教育の実践と成果について

—美術鑑賞教材としての《大島風物図屏風》の位置づけと授業実践—

稲垣 尚人

はじめに

当美術館の誇る魅力は、話題性に富んださまざまな企画展とユニークな形で行われる美術教育普及活動にある。各企画展には、担当学芸員によるギャラリートークをはじめ、企画展に関連した講師を招聘して講演会を開き、音楽会や落語、講談など、多角的な視点から企画展へのアプローチを試みている。中でも、企画展にまつわるワークショップでは、実際に展示作品の作家を講師として招聘したり、地域のレストランや和菓子店のシェフを招いて盛り付けの技術や和菓子作りの技を紹介したりするなど美術の範疇を超えた試みをしている。

また、開館当初から、市内の7小学校5年生児童と5中学校の1年生生徒、約1,350人を対象に美術館学習を開催し、企画展の作品を分かりやすく説明しながら鑑賞する機会を得ている。本物の芸術作品に触れる機会があることは豊かな情操を育む点でとても効果があり、子どもたちからの感想は、「楽しかった」「感動した」「興味を持った」などの意見が多い(図1)。

しかし、美術館学習は、実質1時間程度の鑑賞時間という制約がある。企画展全体の趣旨や見所を説明し(図2)、残りは自由に見学する時間に充てている。事前に資料やワークシートを作成し、これを基に各作品を巡り見所を紹介している。こうした事前準備の甲斐あって、何の予備知識もない子どもたちが美術館学習を体験して帰る頃には作品のすごさに驚き、美術館に興味を持っている。美術館学習の大きな目標は本物に触れる(間近に見る)ことにあり、そのため美術館職員からの説明や解説はどうしても一方的になりがちである。子どもたち自らが作品に向き合って考え、鑑賞していく力を育てる場にはならないのが現実である。きちんとした鑑賞の授業を組み立てて、子どもたちが自らの力で作品に向き合い、対話し、作品からのメッセージを読み取る力を育てていく機会も必要だと思う。

近年、文部科学省が学校指導要領で示している「図画工作・美術教育における〈共通事項〉の項目の設定」¹⁾により、表現と鑑賞をより有機的・横断的に取り扱い、子どもたちの造形的な発達を促すことを真の目的に据えることが明瞭になった。さらに2019年の改訂では、「育成すべき資質・能力の三つの柱」(図3)を規定し、意欲、思考・発想、造形的技能、鑑賞の4つの項目での評価を行ってきたものを「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力」「人間性力」に組み替え、「鑑賞」を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」の中の「知識」と「思考力・判断力」の中に位置づけるように変わってきている²⁾。図画工作や美術は、ともしれば表現力のみで評価され、鑑賞は二の次であったが、深



図1 美術館学習のようす
《空間に線を引く 2019年9月5日》新川小



図2 美術館学習のようす
《服部長七展 2019年11月1日》新川中

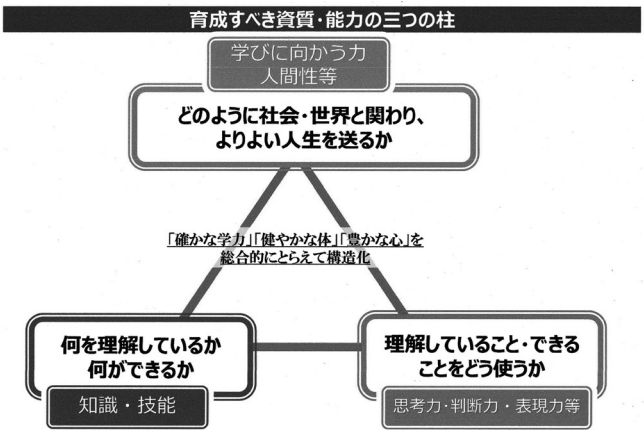


図3 指導要領 育成すべき資質・能力の3つの柱

い洞察力や感じ取る力も重要な教育目標に位置づけられるようになった。今まで作品の出来映えのみで評価してきた教科担任にとっては、作品鑑賞を含めた子どもたちの気づきや育ちを評価していくことは更に難しく、戸惑いが生じているのが現状だろう。

令和2年2月から、当美術館は工事のための休館に入り、美術館では企画展ができないと同時に、美術館学習もできない状態になった。その代わりとして、美術館職員が学校に出向き、美術館所蔵の作品を鑑賞する授業を実施することにした。子どもたち自らが作品に向き合い、作品に込められたメッセージを読み解き、作者の制作意図を考えようという授業である。今年度行った、この実践の経緯と作品を読み解いていった子どもたちの様子について述べてみたい。

1 鑑賞授業《大島風物図屏風》

(1) 図画工作・美術教科書での屏風の位置づけ

小学校5・6年生図画工作(下)の教科書³⁾には、俵屋宗達作《風神雷神図屏風》が32～33ページにわたって記載してある(図4)。鑑賞のめあてとして「絵の中から注目した人やものを選んでみよう。何をしているのか、どういうものなのかを考えたり、かかれていることや見てわかること、想像したことや感じたことを話し合ったりしてみよう」と書かれている。ものを見る力、発見する力、発見から自分の考察を導き出すように鑑賞授業が組み立てられている。そして、子どもたちのことばとして「角が2本生えているし、耳も形がとがっているね。」「小さな太鼓とダンベルみたいなものを持っている。」「雲もすごいなと思った。どうやってかいたのかな。」「二人の間のきょうりが少しあって、きっと対決する



図4 小学校図画工作教科書5・6年下
32・33ページ



図5 中学校美術教科書1年
28・29ページ

ところだと思う。」と発言があり、風神雷神がどんな神であるか、琳派特有の大胆に間を生かした構図がもたらす効果、垂らし込み技法への着目などに話し合いが深まるように工夫されている。

また、中学校1年美術の教科書⁴には、同じく俵屋宗達作《風神雷神図屏風》が23ページ～26ページの見開きで大きく扱われている。また、日本美術の鑑賞として28ページには、尾形光琳と酒井抱一の《風神雷神図屏風》と尾形光琳の《風神雷神図屏風》の裏面に描かれた酒井抱一の《夏秋草図屏風》のエピソードが解説されている。そして、29ページには、尾形光琳の《燕子花図屏風》の左隻や鈴木其一の《向日葵図》(軸装)が載せてある。日本を代表する琳派の作品を紹介するページとして構成されている(図5)。

ここで、注目したいのは、尾形光琳の屏風《風神雷神図屏風》の裏面に《夏秋草図屏風》を描いた酒井抱一のエピソードに教科書が触れている点にある。教科書では、「日本の美術作品には、自然や季節の美を取り入れたものが数多くある。夏の雨雲がもたらす暴風や雷鳴は、時に風神雷神の姿を借りて伝えられた。〈中略〉雨に打たれた夏草と風に吹かれる秋草が描かれている。風神雷神が通り過ぎ去っていくイメージや季節の変わり目の繊細な美しさが伝わってこないだろうか。」と酒井抱一の意図を解説している⁵。ここで重要なことは、屏風の構成がいつも『左右の対』を意識してつくられていることにある。

酒井抱一制作意図は、次のように読み解かれるのではないだろうか。教科書指導書では、「雷神の裏に雨に打たれる夏草、風神の裏には野分(台風)の風にしなう秋草が描かれている。そして、表の華やかな金地に対して、裏は渋い銀地であらわすといったように、表の光琳に應えるかのような演出がなされている。」と述べられている。また、井田太郎氏は著書『酒井抱一』⁶の中で、「即座に連想されるのは、「君子の徳は風なり。小人の徳は草なり。草、之に風を上ふれば、必ず偃す」(『論語』顔淵編)という一説である。「上に立つ者の徳は風のようなもので、下にいる者の徳は草のようなものである。風が善であれば善になびき、悪であれば悪になびく」と述べ、「以上のように文学上のイメージを顧みると、風雨とは君子・神が吹かせ、降らせるもので、草になぞらえる民をなびかせ、育む存在として位置づけられてきた。〈中略〉表と裏は、為政者＝神－雨・風－五穀豊穡・国家安泰－草＝民という関係でつながっている。」と述べている。重要な点は、教科書が《風神雷神図屏風》や裏面の《夏秋草屏風》を掲載することで子どもたちに次のような関係を見付けさせようとしている点にある(図6)。

(2) 藤井達吉作《大島風物図屏風》について

当美術館が所蔵する中で館を代表する作品である《大島風物図屏風》(図7・8)は、作者藤井達吉が1916(大正5)年に発表した二曲一双の屏風である。「藤井

表 尾形光琳作《風神雷神図屏風》				
〈左隻〉	雷神 → 雷		風神 → 風	〈右隻〉
	夕立・雨		野分・台風	
	〈夏〉		〈秋〉	
	神・雲 → 〈天〉〈殿〉		神・雲 → 〈天〉〈殿〉	
	金地 → 〈陽〉〈光〉		金地 → 〈陽〉〈光〉	
裏 酒井抱一作《夏秋草図屏風》				
〈左隻〉	夏草 → 雨に打たれた様子		秋草 → 風に飛ばされそうな様子	〈右隻〉
	水の流れ			
	→ 夕立の後		→ 強い風の瞬間	
	〈夏〉		〈秋〉	
	草 → 〈地〉〈庶民〉		草 → 〈地〉〈庶民〉	
	銀地 → 〈陰〉〈夜〉		銀地 → 〈陰〉〈夜〉	

図6 《風神雷神図屏風》と《夏秋草図屏風》との関係



図7 《大島風物図屏風》表



図8 《大島風物図屏風》裏

は1916(大正5)年に、吾楽会員であった小川千鶴、川端龍子、鶴田吾郎らとともに伊豆大島を訪れている。〈中略〉大島は芸術家にとってユートピア的な土地であった。このときの成果が《大島風物図屏風》で、2ヶ月後には京橋・吾楽殿での展覧会「大島の会」に出品している。」と藤井達吉の全貌展の図録にある⁷。大島は、今でも観光の名所であり、幸田露伴、徳田秋声、藤森成吉、林芙美子、宇野千代、新美南吉や三島由紀夫などの小説家、西条八十、与謝野晶子・鉄幹、野口雨情などの詩人、和田三造、坂本繁二郎、中村彝、村山槐多、石井柏亭、藤田嗣治などの画家、多くの文人が訪れ、作品を残している⁸。

(3) 伊豆大島の気候風土と《大島風物図屏風》の描かれたもの

《大島風物図屏風》は何が描かれているのだろうか。私は、描かれた屏風から島の代表的な植物、椿と桜から冬と春の季節の「対」、島の産業である「米俵」と「桶」(塩)から山と海の「対」と考えた。実際に大島の観光ガイドやインターネットからは、大島椿の椿油や、オオシマザクラ、大島の塩、大島の牛乳などいろいろな産物の紹介がされていた。私は次の(図9)のように、《大島風物図屏風》の「対」の構造を考えた。しかし、疑問が残った。季節を冬とすれば、なぜ米俵を担ぐのだろうか。米の収穫期は秋である。また、裏面に描かれた植物はハマユウだろうか。大島を代表する植物だろうか。

2020年7月18日土曜日放送のNHK番組「プラタモリ」を視聴する機会があった。その番組から伊豆大島の様子が私の想像する大島とは異なっていたことに気がついた。当時の島の生活はユートピアなどではなく、島ならではの過酷な現実もあることが私には見えなかったのである。少ない知識で《大島風物図屏

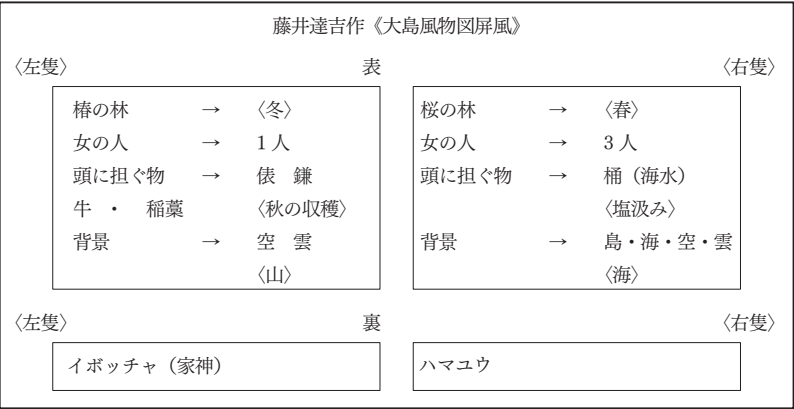


図9 《大島風物図屏風》の左隻と右隻の関係1

風》を勝手に解釈し、(図9)のように判断していたことを反省した。大島は三原山が示すとおり頻繁に噴火する火山の島である。従って、穴だらけの火山灰(スコリア)⁹、火山岩の地表では、降った雨はしみこんで地表を流れることがない。大島には川がなかったのである。島の生活は、貴重な雨水を確保することが最も大切な日常なのである。「あんこ」¹⁰と呼ばれる女の人湧き水の出る山腹まで歩き、桶に水を入れて生活用水を確保したのである。もちろん水が乏しいので水田はできるはずもなく、米の収穫はない。担いでいるのは米俵ではない。鎌も稲刈りのためではない。何を運んでいるのだろうか。

そこで、大正時代の大島の様子について調べ直し、《大島風物図屏風》に描かれているものを見直すことにした。まず、疑問だった米俵の正体は何か、牛にのせられた藁の正体について調べ考え直すことにした。伊豆大島の産業を調べていくと、「大島では、畑で大麦、里芋、大根、大豆などを植えていた。田がなかったため近世前期には年貢は塩で納められた。元禄2(1689)年には釜方村などで製塩された2,000俵以上の塩が納められ代わりに246俵の扶持米が給納されている。」ということが分かってきた¹¹。また、明治になって近代化が進むと「食肉需要の増加で島の放牧馬、牛、山羊が乱獲されて一時はほぼ絶滅したが、その後は肉牛の生産が活発になった。さらに明治30年代に乳牛・酪農が主流となり、1926(昭和元)年の島内の飼育乳牛頭数は1,200頭にのぼっている¹²。」「牛を飼うのは大島の気候風土にとっても適していたようで、温暖な気候の大島に自生するタガヤ、明日葉、オオシマカンسゲなどは丈夫で繁殖力が強く牛の餌に困ることがなかった。また、家畜が必要とする塩分は海から吹く強風のおかげで、草の青葉を食べると自然に摂取された。そのため島の女(あんこ)たちは海辺に牛を連れて散歩するのが日常の光景だった¹³。」以上の内容を考慮して《大島風物図屏風》を考え直すと(図10)のようになる。

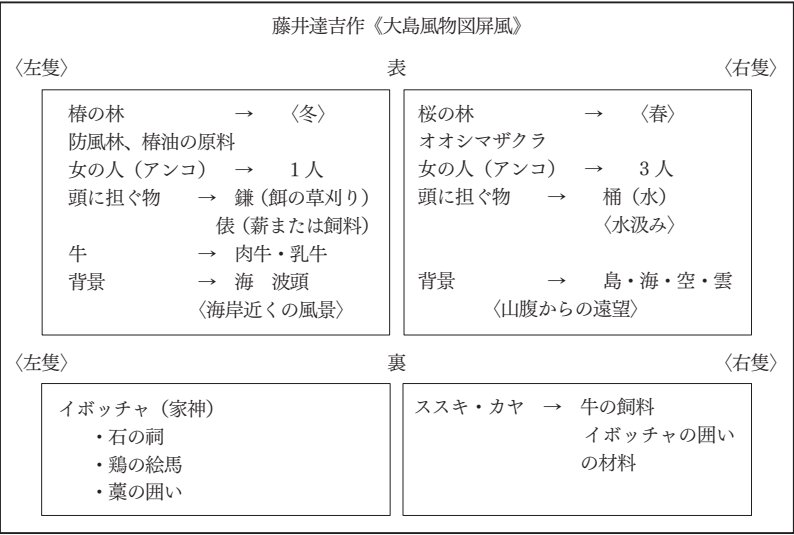


図10 《大島風物図屏風》の左隻と右隻の関係2

左隻の女の人(あんこ)と牛の背景は防風林の椿であり、その向こうには海が広がる。つまり、海岸近くの風景が描かれている。女の方は牛を連れて、海岸近くに自生する草を食べさせながらの散歩の帰りではないだろうか。牛の背中には飼料の草(カヤ)が積まれている。俵の中身は、薪なのか飼料なのか、鎌があるところからみると山または海岸で刈ってきたものだろう。左隻の裏にはイボッチャ¹⁴が描かれ、中には石の祠がまつられ、鶏の絵馬が奉納されている。人家や畑の近く、海辺の景色である。

右隻の桜(オオシマザクラ)の陰に女の人(あんこ)3人が桶を頭に捧げて立っている。桜の陰に3人を配することで、桜の小道がとても狭く一面の桜でトンネルのようにになっていることがうかがえる。山腹の水くみの途中である。背景は海を見下ろす視線にあり、伊豆半島だろうか、反対の利島だろうか、島が描かれている。仕事のつかの間、女たちは、桜の間から見える海を眺めているのである。裏面は、牛の餌であり、イボッチャの囲いに使用されるカヤまたはハチジョウススキである。これも、かすかに残る穂が秋ではなく、冬または早春を感じさせる。右隻は、山の風景である。これが、藤井達吉の描こうとした伊豆大島だと私は想像する。

(4) 《大島風物図屏風》の素材と技法

《大島風物図屏風》は二曲一双の屏風の形式で制作されているが、その素材については、表面は布地に糸の刺繍で制作され、裏面は墨絵に一部彩色が施されている。「凝った技法を駆使しており、赤や青のピロード地の色布を、また女の頭巾や前掛けには緋の生地をそのまま貼付けて、形の輪郭には細紐を二重

に縫い付けてある。〈中略〉さらにその上から調子を出すために着色を施しているように思える。裏にも墨画で植物が描かれているが、藤井の屏風のほとんどに見られるものである¹⁵。」藤井達吉は自著である美術工芸の手ほどきの中で、自由な布素材の選び方に言及している「次には布のお話です。布も亦、絲と同様に何一つとして限定して申すことは出来ません。洋服地、芯地、酒袋、帯芯、豆腐の漉袋地、帆木綿、ビロード、あらゆる材料を得ることが出来ます。例えば帆木綿に木綿の紺糸を用いて刺繍するなどは、材料から言って最もありふれたものでありませうが、それは又、それとしまして他の材料に及ばない味を持って居ります¹⁶。」身近な生活素材である木綿などの布をその風合いを巧みに生かして芸術作品まで高めている点で、藤井達吉は、当時最も斬新だったのではないだろうか。

屏風の構造については、山折りにも、谷折りにも折れ曲がるように出来ており、表面と裏面を模様替えして、立てることも可能である。その理由は、和紙の帯を交互に張り込むことで造られるのだが、《大島風物図屏風》について、この構造を十分に生かせるように表面とは趣を変えて、裏面にもしっかりと墨絵が描かれているのである。

(5) 鑑賞授業《大島風物図屏風》の授業内容

(ア) 小学校5年生の授業内容

2020年9月7日から9日間、碧南市の小学校をまわり、1クラス1時間の授業を実施した。授業の題材名は、「屏風ってなあに？」と決め、《大島風物図屏風》をもとに屏風について深く学ぶという目標を立てて、授業を実践した。

まず、黒板に「屏風」とかいて、漢字の読みを聞き、学習課題が、屏風を知ることにあることを気づかせた。次に、日常の中で使われる屏風をイメージするため、四曲一双の屏風を2つ教卓に置き、前に教室にあったスティック糊を2つ並べた。子どもたちからは、「わかった」と反応があり。「おひな様の後ろにあるもの」と答えが返ってきた。屏風についてのイメージがついたところで《大島風物図屏風》のほぼ原寸のレプリカを提示して見せた。子どもたちは、実物大の大きさに驚いた様子で、興味を持ってくれた。

次に屏風の構造を見てもうらうために、《大島風物図屏風》のミニチュアサイズのレプリカ(図11)を子どもたち一人1つずつ配り、気づいたことを書いてもらった(図12)。子どもたちが屏風が山折りにも曲がることに興味を示した時期に、「屏風を自分たちで作ってみよう」と持ちかけ、屏風の構造を、ワークシートをヒントに自力で作るようにした(図13)。

屏風について気づいたことを発表し、屏風の数え方を教えて、授業を終えた。授業案とワークシートについては以下の通りである。

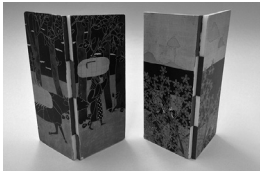


図11 ミニレプリカ屏風



図12 レプリカ鑑賞 大浜小5



図13 ミニ屏風づくり 棚尾小5

碧南市藤井達吉現代美術館

美術館鑑賞授業 小学校5年生

授業内容 「屏風って、なあに？」

― 藤井達吉作《大島風物図屏風》に迫る。―

趣旨 《大島風物図屏風》をもとに屏風について深く学ぶ。

準備(講師) 《大島風物図屏風》(レプリカ、大、小)

材料(学校、児童) 紙リボン(1. 5×5～6cm) 児童数×3、段ボール(5×3cm) 児童数×2、糊、鉛筆、ワークシート×児童数

期日 2020年9月7日(月)～9月18日(金) 各学校 5年生1クラスずつ

時間	学 習 活 動	留 意 点
15	1 本時のテーマを確認する。 ○「屏風」って何だろう ・よみ 「びょうぶ」 ・使われ方「衝立?」「間仕切り」 「ひな祭りにお雛様の後ろにある」 ○「屏風」を見て、不思議に思うことはないかな? ・どうして、曲がっているのかな? 立てるためかな? ・あれ、山折りにも谷折りにも曲がるぞ! ・裏にも絵があるよ。何の絵だろう? ・表は描いてあるのかな? それとも布に縫ってあるのかな?	・《大島風物図屏風》(大きなレプリカ)を見て、屏風についての問題意識を持つ。 ・作者名と作品名を板書し、紹介する。 ・《大島風物図屏風》(大きなレプリカ)での感想から、本時の学習目標を意識できるように、児童の疑問を促していく。 ・《大島風物図屏風》(小さなレプリカ)を配布し、更に細かな注意を引き出す。 ・実際に、屏風を曲げる活動を行い、興味を引くように仕掛ける。 ・裏と表の絵のかき方の違いに気づかせるように材料を質問する。
15	2 屏風が山折りにも谷折りにも曲がる仕組みを調べる。 ・レプリカや屏風のミニチュアを見て、曲がる仕組みを考える。 ・紙テープと段ボールで屏風の模型を工夫して作る。	・どんな構造になっているか話し合う。 ・両方に曲がる紙テープの貼り方を工夫して模型を作る。 ・机間指導し、ヒントを与えて、どの児童も完成できるように支援する。
10	3 《大島風物図屏風》の材料について話し合う。 ○どんな材料で屏風は作られているのかな? ・裏は墨で描かれている。 ・表は布かな? ・布はどうやって色を付けるのかな? ○この屏風の数え方は二曲一双といいます。二とはそれぞれ何の数? ・二は曲がり角の数じゃないかな? ・4つ面があるけど、なんで2なんだろう? ・双って双子のことだろう? ・二つで一つということかな?	・それぞれの疑問に、答えていき、疑問を解決する。 ・答えを出す前に、いろいろな発言に対して肯定的に答える。 ・参考のために、四曲一双、六曲一双の屏風の例を掲示する。 ・片方の屏風は二曲一隻ということも掲示する。
5	4 本時のまとめを行う。 ①屏風は部屋の間仕切りや風よけ、日よけなど、立てて使う。 ②屏風は山折りにも谷折りにも自由に曲がる仕組みになっている。 ③屏風は2つで1つの組になっている。曲がる面の数で二曲、四曲、と数える。	・板書を行い、まとめとする。 ・ワークシートに書き込み、学習を振り返る。

美術館学習ワークシート 小学校 5年 組 名前

屏風(びょうぶ)について学習しよう。
1 屏風を見て、〈気がついたこと〉や〈ふしぎなこと〉を3つ書いてみよう。

①

②

③

2 屏風を作ってみよう。

和紙を図のように互い違いにのりで貼っていく。
(つなぎ目には、のりはつけない。←大事なポイント)

のり

和紙で屏風をつなぐ

3 屏風の数え方

(曲 双)

(曲 双)

4 わかったことや思ったことをかんたんに書こう。

①

②

③

(イ) 中学校1年生の授業内容

中学校へは10月27日から7日間、授業を実施した。題材名は、「《大島風物図屏風》を読み解こう」とし、作品に描かれている内容を調べ屏風についての鑑賞方法を深く学ぶという目標を立てて、授業を実践した。

まず、教科書の23～26ページを開き、俵屋宗達作《風神雷神図屏風》を見て、鑑賞の仕方について練習することにした。キャプションが作品の左下に示しているので、まず、作品名と作者名を生徒たちに探させ、続けて「紙本金地着色」ということばに着目して意味を考えた。着色は「色をつけること」とすぐに答えが出た。次に金地について、質問をした。「金色の背景」と作品の様子から答えが出たので、「金色は何で出来ているのだろう。もう一度、バックをよく見てごらん、模様があるね」と促した。すると「金紙」と答えが進み、更に「金箔」という意見が出た。更に「紙本」については、29ページの鈴木其一の《向日葵図》



図14 教科書で考える生徒 南中1

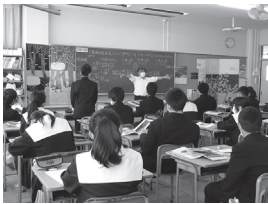


図15 授業全体の様子 東中1

のキャプションと見比べ、「絹本」と「紙本」に意味を確定させていった。こうして、二曲一双という屏風の数え方も教科書のキャプションから答えを探し、自らで答えを導き出すことができた。

この練習をすることで、生徒たちは自らの力だけで思考し回答を導き出せることの自信と解決方法が推理小説の鍵のように見つけることが出来ることに気づいてくれた(図14)。

次に《大島風物図屏風》を手元に置き、気がついたことを書き出していった。その際、左隻と右隻で対になっていることに触れた。気づいたことを話し合っ

て、屏風のテーマを読み解いていった(図15)。授業案とワークシートについては以下の通りである。

碧南市藤井達吉現代美術館

美術館鑑賞授業 中学校1年生

- 授業内容 「《大島風物図屏風》を読み解こう」
- ー 藤井達吉作《大島風物図屏風》をもとに ー

趣旨 作品に描かれている内容を調べ、屏風についての鑑賞方法を深く学ぶ。

準備(講師) 《大島風物図屏風》(レプリカ 大、小)、大島の写真(火山島、島の様子)

材料(学校、生徒) 教科書、筆記用具、ワークシート

期日 2020年 10月27日(火)～11月5日(木) 各学級1時間

過程

時間	学 習 活 動	留 意 点
15	1 本時のテーマを確認する。 「屏風」はどんなものですか？ ・「びょうぶという。」 ・使われ方「衝立?」「間仕切り」「ひな祭りにお雛様の後ろにある。」 ・「折れ曲がっている。」 ・「左右、1対になっている。」 ・「絵が描いてある。」 ○教科書(P23～26)の《風神雷神図屏風》キャプションを読んで、気づいたことを話し合う。 教科書の絵や説明から気づいたことはあるかな？ ・「左に雷神、右に風神が描いてある。」 ・「左右一対のものじゃない1つだけの屏風もある。」 ・「二曲一双ってどんな意味?」 ・「右の《燕子花図屏風》は六曲一双とあるぞ。6枚あるからかな?」 ○ワークシートの問題に注目して、話し合いをする。 ・「屏風は左右一対になっている。」 ・「屏風の面の数で二曲、六曲という。」 ・「右の屏風を右隻という。」 ・「一双は何かわからない。二双だと思う。左右2つあるから。」	・教科書《風神雷神図屏風》(P23～26)を見て、屏風についての問題意識を持つ。 ・生徒の意見を板書しながら、「屏風」のイメージを整理する。 屏風(びょうぶ) 左 絵 右 絵 ・ワークシートを配り、話し合いの視点を明確にする。 ・隣同士で話し合うことで、問題を共有し自分たちで解決する手掛かりにする。 ・話し合ったことを板書にまとめる。 屏風(びょうぶ) 左(隻) 1 絵 2 右(隻) 1 絵 2 二曲一双

20	2	《大島風物図屏風》(レプリカ小)を見て、気づいたことを話し合う。 ・「布で作られている。」 ・「裏にも絵がある。」 ・「墨で描かれている。」 ・「女の人 が描かれている。」 ・「左隻の女の人 は俵を担いでいる。」(中身はコメ?→稲刈りの鎌) ・「右隻の女の人 は桶を担いでいる。」(中身は水? 塩?→島に井戸があるのかな?それとも海水?) ・「左隻には牛がいる。牛が背負っているのは何だろう?」 ・「左隻に椿と右隻に桜の木が描かれている。」 ・「背景には大島の海がある。」 ・「左隻は椿の前に女の人、右隻は桜の背景に女の人。」 ・「椿の背景は海?桜の背景も海?」 ・「高い位置から海を見下ろしている。」	・《大島風物図屏風》(レプリカ小)を2人1組で交換しながら見るように指示する。 ・どんな絵が描かれているか、素材の工夫、裏表など。左隻、右隻を交換しながら鑑賞する。 ・左隻と右隻に分けて、生徒が発表した内容を板書して整理していく。 ・大島の写真を黒板に貼る。 ・生徒の発言に対して、教師が問い返して発問内容を深めていく。話題を反らさず、付け足す発言を促す。 例「女の人 がいる。」 「どんな格好?」 「着物」「頭に頭巾」「何か載せている。」 「載せているもの 左と右は違うね。」 「右は桶だ。」「左は俵かな?」 「中身は?」 「左は米?」「大島って田圃はあるかな?」 「右は?」「水かな?」「大島って水はどうしているの だろう。」「川の水?」「海の水?」
10	3	《大島風物図屏風》で藤井達吉が仕掛けたテーマについて話し合う。 藤井達吉さんが左隻と右隻で意識したことは何かな? ・「右は大島の春?」 ・「左は大島の冬?」 ・「椿は冬だ 桜は春だ。」 ・「裏の左隻の絵は山のもの?」 ・「裏の右隻の絵は海の植物?」	・題名の「大島の風物」をヒントにして何を対にしたのかに視点を絞っていく。 ・裏に描かれたものについても左隻と右隻の対をヒントに答えを追求していく。 ・考えを自由に出せるように肯定的な評価と励ましをする。 ・発言に対して理由を問い返すことで思考を深める。
5	4	本時のまとめを行う。 ①屏風は左右2つで一組になっている。一雙という ②絵の題材も左右で対になる。 ③曲がる面の数で二曲、四曲と数える。	・板書を行い、まとめとする。 ・ワークシートに書き込み学習をまとめる。

〈板書〉

大島風物図屏風 (びょうぶ)		藤井達吉 作	
左(隻)	右(隻)	左(隻)	右(隻)
1	2	1	2
二曲一雙		二曲一雙	
〈表〉		〈表〉	
椿 (やぶ椿)		桜 (大島桜)	
植物		大島が原種 桜餅の葉	
防風林 → (畑や家の囲い)		ソメイヨシノの元種	
椿油 → 大島の特産品		山に自生している	
女の人 (あんこ) 1人		女の人 (あんこ) 3人	
人		人	
俵 (畑の作物)		桶 (水)	
頭にのせるもの		山へ水汲み(清水の湧く)	
薪や作物を積んで運ぶ (女の仕事)		ハマンカーや清水に水くみ (女の仕事)	
背景に波 (海)		背景	
平地		海 島 (伊豆半島) 雲 空	
視点		丘から見下ろした風景	
牛 (家畜)・背負っている草 (飼料) 動物			

大島の町 (畑)	①2つで一組	大島の高台 (山)
冬	②画題が対になる	初春
〈裏〉	③裏にも絵	〈裏〉
生活の場		自然 (群生地)
藁がこいのもの		草
いぼっちゃ (島神様)	墨で描かれている	ハチジョウススキ
神様のおうち (ススキ、萱)		丘に自生している
神社に祀られている		
(淡に墨描き)		
藤井達吉さんは、島 (大島) の		を表現した。

美術館鑑賞授業《大島風物図屏風》を読み解く		
中学校1年 組 名前		
○屏風について考えてみよう。 <u>屏 風</u>		
○大島風物図屏風について気づいたことを3つ以上書いてみよう。		
○左隻と右隻の 対 を見つけよう。		
〈左隻〉	表	〈右隻〉 表
〈左隻〉	裏	〈右隻〉 裏
○藤井達吉さんは「島 (大島) の」を表現した。		
〈感想を書こう〉		

(6) 授業実践を行って ―子どもたちの反応と反省―

(ア) 小学校5年生の反応と感想

授業については、屏風の数え方、屏風造りの作業、《大島風物図屏風》の鑑賞と盛りだくさんの内容であった。しかし、子どもたちの感想からは、「楽しかった」「うちできちんとした屏風を作りたい」「屏風の数え方が分かった」など前向きな感想が多く聞かれた。担任の先生からは、「子どもたちが生き生きと活動できた」や「屏風を作る作業があり、山折りにも谷折りにもなる仕組みに驚いた」と授業については好評を得ている。

新型コロナウイルスの感染が懸念される中、授業でのグループ活動が出来ないため、グループで屏風作りをする計画を、子ども一人一人に段ボールと紙テープを渡して屏風作りをする活動にかえた。さすがに美術館側で400人分の材料の準備は難しく、各学校に一人2つの段ボールと3本の紙テープの準備をお願いした。担任の先生には負担をかけてしまった(図16)。しかし、子どもたちには、自分たち一人一人が屏風を作ったことで意欲化につながった。出来上がったことを喜び、「家でも屏風を作りたい」という感想が多かった(図17・18)。

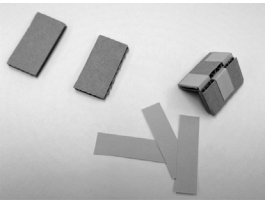


図16 ミニ屏風の手作り模型と材料



図17 ミニ屏風づくりからの発展

4	わかったことや思ったことをかんばんに書こう。
①	いつもは絵を見る時はキレイだなと思ってたけどおもしろかった。
②	またダンボールで作りたと思った。
③	屏風の数え方は二曲一双と言うんだなと思いました。

図18 西端小学校児童ワークシート

子どもたちが書いたワークシートからは、多くのことが分かった。屏風のミニチュアを渡したことで屏風が山折りや谷折りになることに興味を持つ子どもたちが多かった。「屏風を折り曲げると挟んである紙テープの色が変わる」とか「屏風の間にZの形の紙テープがあって、これが交互に入れ替わる」などの気づきを書いている子どもたちもいた。子どもたちの気づきで多かったものは、「牛がいる」「人が歩いている」「桜が咲いている」「俵を担いでいる」というもので、「椿が咲いている」と書いた子どもは少なかった。これは、屏風のミニチュアの印刷が悪く、赤い花が認識できなかった点にある。また、「屏風の裏に字がかいてあった」と藤井のサインを見つける子どもや「にわとりが描かれている」「家のようなものがある」と裏面に注目する子どももいた。「全体に暗いので左隻は夜」と書いている子どもや「空が黄色い」「地面が黄色」など色に着目する子どもや「輪郭線が同じ太さ」「顔の目鼻が描かれていない」「裸足で歩いている」など布や刺繍で作られている糸口を見つける子どももいた(図19・20)。

実物を見れば、一目瞭然で素材が布であることや左隻が椿の木であることが分かるのである。実物ではないレプリカでの学習の限界がある。

美術館学習ワークシート 鷺塚 小学校 5年 組 名前
屏風(びょうぶ)について学習しよう。
1 屏風を見て、<気がついたこと>や<ふしぎなこと>を3つ書いてみよう。
① 屏風は山折りと谷折りがあふ。
② 使われている色が白っぽい。
③ リント付と線が白色の線。いいとこに気づいたね!

図19 鷺塚小児童ワークシート表面

屏風について授業していただきありがとうございました。
最初は屏風といわれてもよくわかりませんでした。でも授業をしてくださってありがとうございます。屏風についてたくさん知ることができました。
二曲一雙や屏風の仕組みを知りました。
美術館に行くと、屏風などを見てみたいですね。
今日は、本当にありがとうございました。

図20 鷺塚小児童ワークシート裏面

(イ) 中学校1年生の反応と感想

中学1年生の授業目的が、「大島風物図屏風」を読み解こうにあり、生徒たちに提示した資料も屏風のミニチュアから写真のラミネート判に変えたため、視点が屏風の構造や素材の特徴よりも絵のテーマに関係するものになった。ワークシートには、「左隻には、牛をつれた女の人が描かれているが、右隻には、頭に何かを載せた女のの人が3人描かれている」「左隻のバックは暗いが、右隻は明るく、黄色い」「右隻の空は金箔が貼られている」などの左隻、右隻の対を意識して考えられていた(図21)。

特に、「左隻は、暗いから夜空で、右隻は明るいので昼だろう」とか「左隻は、米俵を積んでいるので、収穫の秋を表現し、右隻は桜の花が咲き、春を表現している」と時間や季節を表現していることに気がついている生徒が多くいて、洞察力の深さを実感した。また、裏面の鶏に着目した上に、これが絵であることに気づいて、「絵馬」を導き出す生徒もいた。

○藤井達吉さんは「島(大島)の季節の移り変わり」を表現した。
<感想を書こう> 今日、藤井達吉さんの描いた「大島風物図屏風」を見て、これは実際の色で描かれていないということは達吉さんの大島に対する気持ちを色で表現したと思った。私はそのことが冬は静かな感じだけど春になると明るく美しい景色がやって来る、という「季節の移り変わり」を表していると思いました。また実際に作品を見てさらにそのことを深く見れるといいなと思います。

図21 中央中生徒ワークシート

逆に、小学校5年生が見つけた、「輪郭線の太さが同じ」とか「裏面に文字が書かれている」などの自由な視点が少なかったのは、授業の流し方の悪さを反省しなくてはならない。

小学校5年生と同等、中学生も「楽しかった」と授業を集中して過ごせたことを示す感想が多かった。中でも、「友達の意見を聞いて、いろいろな考え方や見方が出来ることに驚いた」「友達の意見を聞いたり、自分の意見を発表したりするうちに考えが深まっていくことを感じた」また、自分の家に自生する椿の木と比較して「椿の木は、それほど大きくないのだから、この女の人は小人数ではないか」という意見が出て、生徒たちの思考の深さと自由さに私も驚いた(図22・23)。

○藤井達吉さんは「島（大島）の生活」を表現した。
<感想を書こう> 回屏風のこれについてより知れたし、楽しかったよと、お母さんに回屏風をしながらじっくり見て考えたことがなかったから、あらためて見ることができたよと、お母さん。

図22 新川中学生ワークシート

○藤井達吉さんは「島（大島）のくらし」を表現した。
<感想を書こう> 屏風を初めて見たけど、じっくり見ることで面白い発見をすることができ、友達の意見を聞いて自分にはなかった発想を知ることができた楽しさを改めて学ぶことができました。

図23 中央中学生ワークシート2

2 成果とその考察

美術館学習を鑑賞授業の形で行ったことは、子どもたちの観察力や洞察力を高めることにつながったと感じる。特に、話し合いをするうちに子どもたちの考えが深まっていき、作者の制作意図に迫る意見を聞くことが出来たことは大きな成果だった。こうした考えの深まりは、通常的美術館学習では決して得られないことである。美術館で実物の作品を前にして、鑑賞の授業がこのように出来ることが理想なのであるが、現実的には時間や場所などいろいろな制約があり無理であろう。

できれば、美術館学習と鑑賞出前授業をセットで行い、子どもたちの鑑賞力と洞察力を高めた上で、実物に触れて自由に意見を述べ合う形がいいのではないだろうか。何よりも、担任の先生方が鑑賞授業の達人になってくれることが大切なかも知れない。そのためにも、私たち美術館側が積極的に学校のニーズに応えていくことが大切なのだと思う。

3 今後の課題

(1)美術館の情報化に向けて

今回の美術館学習の課題として、学校に出向いて鑑賞授業を行う場合、「実物により近いレプリカ」を資料として提示する必要性を感じた。そのためにも、4Kや8Kに対応したディスプレイや精密なプリンターの必要性を感じたのである。刷り上がった色が暗く、椿の色が分からなかったり、作品が絲や布で制作されてことがわからなかったりしたことは、美術館のもつ教材機器としては再考を要すると思う。これからの美術館のあり方としては、新型コロナウイルスの流行などで問題になった、美術館に来られない人にも配慮できる美術館情報の配信を考えていく必要があるように思う。だとすれば、美術館学習で得たノウハウを情報発信に生かすことも可能だと思うのである。

(2)学校教育との連携を考えた美術館のあり方

美術館学習をこのような形で実現できたことで、今まで、「タッチカード¹⁷⁾」(図24)のみで鑑賞の出前授業を行ってきたが、本格的に鑑賞の授業として美術館の作品を紹介することができるようになった。その中で、心掛けたいことは「図画工作」や「美術」の教科書と必ず関連付けることである。美術館の授業は、学校にとっては教科カリキュラム外の授業であり、息抜きの日と捉えられても仕方がない立場である。逆に、教科に絡んだ重要な学習内容であれば、学校にとってなくてはならない大切な授業に変わる。

私自身の経験でもあるが、長谷川利行の《汽罐車庫》を当美術館で見たとき、感動とともに頭によぎったのが「これが、教科書に載っていた《汽罐車庫》だ」の思いだった。つまり、学生の時に触れた教科書の作品が我々市民にとって身近なものなのである。美術館が市民にとって身近なものになっていくためにも、学校との連携は大切になってくると感じている。



図24 タッチカード一式

(註)

- 1 平成20年6月 文部科学省刊行 小学校学習指導要領解説 図画工作編 7頁
平成20年6月 文部科学省刊行 中学校学習指導要領解説 美術編 7頁
- 2 平成29年6月 文部科学省刊行 小学校学習指導要領解説 図画工作編 8頁
平成29年6月 文部科学省刊行 中学校学習指導要領解説 美術編 8頁
- 3 平成26年2月文部科学省検定済 日本造形教育研究会著作 開隆堂出版社発行
- 4 平成27年3月文部科学省検定済 酒井忠康ほか21名著作 光村図書出版株式会社発行
- 5 光村図書出版発行 中学校美術教科書28頁
- 6 2019年9月20日発行 近畿大学文芸学部教授 井田太郎著 《酒井抱一 俳諧と絵画の織りなす抒情》岩波新書 231～234頁 四「夏秋草屏風」の両義性 より
- 7 2014年4月《藤井達吉の全貌 一野に咲く工芸・宙を見る絵画》展図録 制作／発行(株)キュレーターズ 102頁 工芸的な屏風について より
- 8 2010年《伊豆諸島を知る辞典》樋口秀司編・執筆 東京堂出版発行 68～70頁 大島来島の

文人墨客 より

- 9 スコリア《sucoria》火山碎屑物(さいせつぶつ)の一種。黒色で多孔質の岩片。岩滓(がんさい)《大辞泉》小学館株式会社発行 1992年第2版より 1423頁に記載
- 10 あんこ《「あねこ」の音変化》伊豆大島で娘のこと《大辞泉》小学館株式会社発行 1992年第2版より 100頁に記載
- 11 伊豆大島 Wikipedia / URL [//ja.wikipedia.org/wiki/伊豆大島](http://ja.wikipedia.org/wiki/伊豆大島)
大島町商工会 伊豆大島の産業「海塩」URL / island-net.or.jp/topics/170217/index.html を参考
- 12 平成27年3月 伊豆大島地域資源情報集 伊豆大島 大島観光協会編 56頁
URL / izu-oshima.or.jp/upload/izu/zuf72e3016a112780725218cdc3b5f451.pdf を参考
- 13 平成27年3月 伊豆大島地域資源情報集 伊豆大島 大島観光協会編 56頁
Webマガジン「発酵美食」酪農は風土に根付く頼もしい産業(マルコメ味噌HP)
URL / marukome.co.jp/marukome_omiso/hakkoubishoku/20190404/875 より 参照
- 14 イボッチャ 地神様のこと 柳田国男編《伊豆大島方言集》中央公論社出版
石の祠が作られる前は、萱(カヤ:ススキ)を数十本束ね、下方を地上に円錐形に広げて一方に口を設け、中に御幣を一对立てた素朴な祠
グローバルネイチャークラブガイド日記2011年1月14日 地神様・いぼっちゃ URL / blog.goo.ne.jp/gscnikuguide6/e/57f30138bd2f5029f4997799567731d7 より 参照
- 15 2014年4月発行《藤井達吉の全貌 一野に咲く工芸・宙を見る絵画》展図録 制作/発行(株)キュレイターズ 102頁 工芸的な屏風について より
- 16 1930年 藤井達吉著《美術工芸の手引き》博文館発行 62頁より
- 17 平成27年 碧南市藤井達吉現代美術館発行 碧南市の小中学校への教育普及のため、碧南市藤井達吉現代美術館所蔵作品から40点を選んで写真カードにしたもの。大判(42cm×30cm)、中盤(30cm×21cm)カード判(10cm×15cm)活用の手引き(ゲームの進め方など)のセットで構成。